フランスにおける中国系移民第二世代が立ち上がるとき
―「フランスの中国系青少年アソシエーション（AJCF）」の事例から―

The Rise of Second-generation Chinese Immigrants in France:
A Case Study of the Association des Jeunes Chinois de France

村上　一基
Kazuki MURAKAMI

1．はじめに

フランスにおいて移民第二世代の問題は、学校への適応・不適応、進路選択、差別、就学を終えた後の排除、そして非行・犯罪などと結び付けられ、特にマグレブ系移民（アルジェリア、モロッコ、チュニジア）やサブサハラ系移民（セネガル、マリなど）の子孫が主な対象とされてきた。これらの議論において本稿で取り上げる中国系移民を含むアジア系移民には特殊な位置付けがなされている。すなわちかれらは「モデル・マイノリティ」として捉えられ、学校不適応や非行の問題などには直面していないとされてきた（Santelli 2016＝2019；Tribalat 1995）。しかしながら、1990年代以降に流入した中国系新移民の子どもには学校不適応の問題がみられ、自治体レベルで実態調査が行われるなどもした（Cattelain et al. 2002）。さらに近年ではアジア系市民に対する差別や暴力なども顕在化し（Chuang 2017）、とりわけコロナ禍において人種主義は重大な問題となった。このように中国系移民の子どもや第二世代もフランス社会への統合やアイデンティティの問題を抱えており、2009年には第二世代自身によって「フランスの中国系青少年アソシエーション（Association des Jeunes Chinois de France、以下AJCF）」が設立されるなどもしている。

本稿では、中国系移民第二世代が「立ち上がり」、設立したアソシエーションの活動目的と内容を考察し、それが若者にとってどのような意味を持つのかを明らかにする。とりわけ、2017年２月から2019年９月までパリ市とオーベルヴィリエ市で実施した調査の結果を用い、こうした若者の活動が、反人種差別運動や政治家との関係構築を通した政治的な参加や、文化的な発信など、「中国系フランス人」としてフランス社会に参加するとともに、そこに居場所を「つくる」活動を繰り広げていること、そして若者たちはアソシエーションを偶然知り、参加することで、自らのルーツを探求し、同じルーツを持つ若者同士で連帯することに意義を見出すことを論じる。

調査は、２回の各３週間程度の滞在（2018年３月ならびに2019年３月）を中心に、他の短期滞在中やオンラインでの事前・補足調査を実施した。具体的には、第二世代（17名）、自治体やアソシエーショ

ン・宗教施設の関係者（12名）、パリ大学区の CASNAV（ニューカマーと旅行者の子どものための就学支援センター）のコーディネーターや中国系新移民の生徒の担当経験を持つ中学校教員、また公立・私立学校で教える中国語教師などにインタビューを行った。第二世代については、スノーボールサンプリングで協力者を募ったが、そのうち11名がAJCFのメンバーであり、創設メンバーや調査時点での代表も含んでいる。

以下では、先行研究を検討した後（第２節）、第３節で中国系アソシエーションの変遷について説明し、第４節でAJCFの活動について反人種主義の運動と文化プロジェクトの２つの側面から検討する。第５節でAJCFが若者にとってどのような意味を持つのか、インタビュー調査の結果から考察する。最後にまとめとしてAJCFのもつ特徴をその他の出自を持つ移民第二世代の団体や日本の事例についても触れつつ明らかにしたい。

表　AJCFに参加するインタビュー協力者

	年　齢	性　別	ルーツ	学　　歴
A	31	男	温州	修士
B	41	男	温州	学士
C	26	女	温州	修士
D	30	男	潮州	修士
E	26	男	温州	修士
F	25	男	広東	修士
G	26	女	温州	修士
H	24	女	温州	修士
I	25	男	潮州	修士
J	25	男	温州	修士
K	32	男	広東	職業訓練センター（学士レベル）

２．先行研究の検討

フランスの中国系移民をめぐる先行研究では、中国系移民の多様性とそれぞれの移住経路についての分析（Beraha 2012; Chuang 2013b; Lévy et Lieber 2009; Poisson 2005, 2006; Yun et al. 2006; Yun et Poisson 2005）や集住地区に関する都市社会学的ないし地理学的研究（Chuang 2013a, 2015, 2021; Chuang et Trémon 2020a, 2020b; Li 2021; Pribetich 2005）、経済活動・就労に関する社会学的研究（Chuang 2015）、送出し地域とのつながり（Li Z. 2020）などに関する研究がなされてきた。近年では若者の社会統合について社会心理学的アプローチを取り入れた研究（Wang 2017）や、アジア系市民に対する人種主義的暴力への抗議運動といった中国系移民の集合行為や政治参加についての研究（Chuang 2015, 2017, 2020; Chuang et Le Bail 2019, 2020; Le Bail 2017）、また移民の集合行為に対す

る中国政府の外交上の役割（Tran et Chuang 2019）などについての研究がなされている。さらに、留学生に対しても関心が寄せられるようになっており、それを新たな中国系移民の波と捉え、そのキャリアや政治参加などについての研究が進められている（Li Y. 2020; Wang 2020; Yong 2020）。しかし、これらの研究は、「移住」のプロセスやディアスポラとしての中国系移民に対する関心を示すものであり、フランス社会における第二世代の経験などはほとんど議論されておらず、若者のアソシエーションについても言及はされるものの十分な考察はなされていない。

中国系移民第二世代の研究として、山本（2014）によるイギリス、フランス、オランダの教育人類学的な比較研究やRuoxi（2020：151-64）による第二世代の統合の状況についての世代間比較の研究があるが、主に教育達成に関する質的ないし量的研究であり、かれらの経験やアイデンティティ、さらにアソシエーション活動などへの言及は限られる。反人種主義運動における若者の参加や人種差別の経験（Chuang 2020; Chuang et Le Bail 2019, 2020; Chuang et al. 2020）なども論じられ、特にChuangの研究ではAJCFについても取りあげられているが、人種主義に対する集合行為の側面にのみ焦点が当てられ、その多様な活動や参加する若者の経験については十分に論じられていない。

他方、中国系移民のアソシエーションについての研究として、ピカールらの研究（Picquart 2003）やそれを参考にした山本（2014：64）の研究がある。これらの研究は中国系移民アソシエーションを、同郷組合や商業組合、同窓会、宗教団体などの中国系移民自身で設立された団体である正統チャイニーズ・アソシエーションと、社会統合支援などの活動をフランス人やフランス語が堪能な中国系市民が行っているフランコ・チャイニーズ・アソシエーションにわけて論じている。しかし、この枠組みは第一世代のアソシエーション活動がもっぱら対象となるもので、世代交代を経験しているコミュニティのアソシエーションを十分に論じられていない。

それを乗り越えようとしたチェンによる研究（Chen 2016）は、AJCFやアソシエーション「フランスの中国人・中国のフランス人（Chinois de France–Français de Chine）」のような近年設立されたアソシエーションが、どのように中国系移民アソシエーションの形態を変え、それらを刷新し、公共空間のなかで可視的にしたのかを論じた。ただし、チェンの研究では、アソシエーションの活動内容の考察が中心であり、そこに参加する若者たちの経験は十分に論じられていない。本論文では、こうした第二世代のアソシエーション活動とその第二世代自身にとっての意味を明らかにしていく。

3．新しい世代の中国系移民アソシエーションへ

⑴　フランスの中国系移民とアソシエーション

フランスはヨーロッパでもっとも中国系移民を受け入れている国である。2010年代には約40から48万人の中国系移民が滞在するとされ、そのうち５万人前後が非正規滞在者とされた（Wang et Le Bail 2016）。この統計にはその子孫は含まれておらず、またフランス国籍を取得した人びともいるため、中国を出自に持つ人びとは約60万人以上居住すると考えられている（Beraha 2012：11）。なかでも温

州からの移民は約16万人と大陸中国からの移民の約７割を占める（Beraha 2012：12）。また、中国系移民は、その大半がパリおよび周辺自治体に居住していることに特徴付けられる。

中国系移民第二世代は大きく２つの出自に分けられ、まず1970年代から80年代に受け入れたインドシナ難民出身者の子孫がいる。1975年から87年までに約14万5000人が入国し、その50から60％が潮州や広東などを出自に持つ華人系であった。かれらはパリ13区の高層の公営団地に居住し、「パリのチャイナタウン」を形成した。その第二世代はフランスにおいて長い間、統合に「成功」したと捉えられてきた（Tribalat 1995）。

次に、1980年代から90年代に増加した中国系新移民の子孫がいる。中国本土からの移住は1964年の国交再開後に親族がいる者に限ってなされたが、文化大革命によってそれは再度禁止された。その後、1970年代末からの改革開放政策を進める中国政府によって移住が促進され、浙江省温州から多くの移民がフランスにやって来た。温州からの移民は「家族団欒型移住」（朱 2018）といわれており、親族ネットワークを頼りに非合法で入国し、何年にも及ぶ非正規滞在の後、正規化された者が多い。パリ３区のアール・エ・メチエやベルヴィル、近年ではオーベルヴィリエ市などに多く住んでいる。本稿でとりあげるAJCFの創設メンバーはこの中国系新移民出身である。かれらの多くは、幼少期の非正規滞在や親の職業などをめぐって、さまざまな「共通の経験」をしている。

中国系移民が多く住むパリ市では、中国系アソシエーションの数も多い。前述のピカールの分類にならうならば、とりわけ、同郷組合や商業組合、同窓会、宗教団体など、中国系移民自身で設立された団体である正統チャイニーズ・アソシエーションが多く活動している。中国系アソシエーションの大半がこの種の団体であり、これらは基本的に移住先で同郷者や友人とつながりを作り、息抜きのために集まったり、自分たちが直面する問題を話し合い、ときには助け合ったりするために設立された。金銭や時間、知識、能力などを出し合って運営がなされ、活動場所も寄附によって購入している。パリ市内の集住地区では、これら正統チャイニーズ・アソシエーションによる中国語教室が可視的であり、今日では多くの同郷団体や職業団体、また宗教団体などが中国語教室を提供している（村上 2021）。

中国系移民第一世代のアソシエーションには、グループの連帯の場を提供することがもっとも大きな機能としてあった。それに対して、第二世代のアソシエーションはだんだんと社会において自分たちの社会統合を実現したり、社会に発信していくような活動を行い、文化活動や政治参加を通してコミュニティ外部とコミュニケーションを図り、フランスの公共空間での存在を獲得していく（Chen 2016：42）。

⑵ AJCFの設立目的と活動

AJCFは2009年に設立され、2021年現在、約500人の会員がいる[1]。アソシエーションは、中国出

1 AJCFのウェブサイト（https://www.lajcf.fr/a-propos-de-nous、2021年12月５日最終閲覧）による。

身のフランスの若者が自分たちの二重の文化を理解し、それを発信できるようにすることを目的に、交流や意見交換の場を提供するものである。この団体が目指すものは、１）フランス人・中国人としてのアイデンティティを発見すること、２）中国文化を広めること、３）中国人移民の歴史を発見すること、４）人種主義と闘うこと、５）教育を通して関心を持たせること、である。

創設メンバーの中心は温州出身の中国系新移民の第二世代であるが、それ以外にも中国出自を持つインドシナ難民の第二世代なども参加している。メンバー間にこうした出自による差異化はなされておらず、例えば前代表で、現在も副代表としてアソシエーションを支えるＦはインドシナ難民をルーツに持っていた。

AJCFは2000年代後半からアジア系市民に対する人種主義的暴力が顕在化するなかで、反人種主義運動を活発に行い、メディアでも着目されるようになった。また2020年からのコロナ禍において、中国人をはじめアジア系市民は、「伝染病患者」や「伝染病の原因」と差別の対象とされ、SNS上では「中国人ひとりひとりを襲う」ことを呼びかける投稿がなされるなどもした。AJCFはこうしたコロナ禍における人種差別の問題に対して積極的に活動を行い、2020年には創設メンバーたちがたびたびメディアなどに出演した。

しかしこの団体は、当初中国系の若者同士で連帯し、下の世代を助けることを目的としていた。創設メンバーのひとりであるＡ（31歳男性）は、両親もフランス語が上手く話せず、フランスの教育システムを知らなかったため、勉強を手伝ったり、進路選択でアドバイスしたりしてくれる人がいなかったが、「アソシエーションを作ることで、自分たちがモデルとして下の世代に情報や経験を伝え、励ましていきたいと思った」と語る。そして、自分たちに対する偏見や差別などにも直面してアソシエーションの設立を決める。

> 「私たちが育ったときは多くの情報を欠いていたと気付いたことから、このアソシエーションを設立しました。フランス社会には私たちにとって必ずしも心地よいものではないことがたくさんあります。私たちは２つの点で情報を欠いていました。まず、日常生活や勉強、ビジネス、会社などで成功するための情報です。なぜなら、私たちにはフランスで勉強をしたり、企業のインターンシップを経験した親近者がいなかったからです。それは難しい状況をつくっていたんです。そのことを、大学に入ってブルデューやウェーバーなどの社会学を勉強して理解しました。
>
> また、私たちは嫌な経験をしていました。2000年代から中国の好感度が悪化したのです。それは私たちの日常生活にも影響がありました。フランスの中国人商人を悪い商人だとしたり、レストランが清潔でないとしたり、不正取引をしているといったように描いた記事やテレビのルポルタージュが増えたのです。それはわれわれの毎日の生活に波及したんです。ときには友達に非難されることがあったり、中国のことを話すとき私たちが直接非難されることもありました。それはとても不快なものでした。」（A 31歳男性）

こうして、とりわけメディアにおける不公平な状況に対応したり、自分たちのことを知り、下の世代に情報を伝えるためにAJCFが設立された。まず、自分たちがなぜフランスにいるのか、自分たちの家族がなぜフランスに来たのか、フランスにどれだけ中国系の人びとがいるのか、なぜ親全員が同じような仕事をしているのか、仕事を変えることはできるのかなど、自分たちについて理解する必要があったという。さらに、学校で成功するためのネットワークがなく、Aたちの世代には遅かったが、自分たちよりも若い世代のためのネットワークをつくり、助言をしたり助けたりしたいと考えた。設立に際して、すべてのメンバーはフェイスブックを通して知り合ったという。

AJCFの日常的な活動は若い世代へのコーチングの実践や、月一回の交流会、中国や中国文化・中国語の学習や発信など多岐にわたり、メンバーでそれぞれの担当を決めて活動やイベントの企画・開催をしている。設立から10年以上が経ち、メンバーも入れ替わるなかで、それぞれがアイデアを持ち寄り、新しいプロジェクトを立ち上げるなど、活動は多様化している。

さらに、AJCFは議員などと関係を築いたり、実際にメンバーのなかから地方議会議員になることで、政治的にも関与している。例えば、2014年の市区町村議会議員選挙にオリヴィエ・ワンが立候補し、パリ19区の助役になっている。

これらの活動からわかるのは、AJCFが共同体への閉じこもりを避け、社会で承認を得るために他者とのコミュニケーションを重視していることである（Chen 2016：40）。このことがフランスで育った第二世代が設立したアソシエーション活動のもっとも重要な特徴のひとつといえるだろう。

4．フランスの中国系青少年アソシエーションの活動

⑴　人種主義との闘い

AJCFは、反人種主義の活動を積極的に行い、メディアでの露出も多い。そのきっかけは、2011年にパリ市内のベルヴィル地区で行われた「安全を求めるためのデモ」の組織委員会に参加したことだった。2010年６月１日、中国人男性とベルヴィル地区の若者グループの間でカバンの盗難をめぐって乱闘がおき[2]、若い中国人男性が犯人に銃を撃ち、すぐに警察に逮捕され、このことがコミュニティの怒りを引き起こした。2010年６月20日、約20,000人の中国人が「暴力にノー、みんなに安全を」というスローガンで、ベルヴィル地区をデモ行進した。だが、このデモは最終的にマグレブ系やアフリカ系の若者との、そしてそれに介入した警察との衝突という結果に終わってしまう。

2011年５月31日に再度暴力事件が起き、レストラン経営者の息子がリンチに遭い、昏睡状態になる。インターネットでその情報が回ると、すぐに新たなデモが呼びかけられ、2011年６月19日に再びデモ行進が行われた。このデモの準備においてAJCFに声がかかり、フランスメディアへの対応などをすることになった。当時のメンバーは「2010年のデモが非常に共同体的だったため、イメージを変えな

2　2010年と2011年のデモについては、Chuang（2013c, 2021）を参照のこと。

ければならなかった」と手伝うことを決める。2010年のデモはおもに中国人が中心で、中国語で書かれたプラカードなどが多かったのに対して、2011年のデモは「フランス的」なデモであり、場所もパリの伝統的なデモ行進のルートであるレピュブリック広場からナシオン広場を目指し、「安全、それは権利だ」というスローガンのもとで、フランス国旗やフランス語のプラカードなども用いられ、AJCFはそこで重要な役割を果たした（Chuang 2021：171）。

ほかにも、2012年に反人種主義団体「SOSラシスム（SOS Racisme）」と協力して訴訟手続きを行った。2012年８月に発行された週刊誌*Le Point*に「フランスにおける中国人の陰謀をめぐらせた成功」と題した「非正規滞在から成功までの中国系移民の典型的経路」を描写した記事が掲載された。アソシエーションはそれに対して名誉毀損の訴えを起こし、2014年１月24日にパリの軽罪裁判所は、一部の名誉毀損を認め、出自や国籍を理由にした特定の集団に対する公的な名誉毀損のため、1500ユーロの罰金刑を言い渡した。これはフランスではじめて、中国系フランス人を対象とした人種的な名誉毀損の訴えであったという（Chen 2016: 41）。

さらに2016年にオーベルヴィリエ市で中国人男性が３人の若者の暴行を受け死亡した事件に対してAJCFは抗議運動を行い、自治体と交渉し対策をとることを求め、監視カメラが設置された。また、2017年に19区に住む中国人男性が警察によって殺害された事件を受け、警察官の起訴を求める運動にも協力している。

反人種差別の運動はコロナ禍においてさらに活発になり、多様な形態をとるようになった。例えば、アメリカにおけるアジア人に対する暴力に対して、フランスのアジア人として支援のメッセージを送るため、連帯を示すビデオ「#StopAsianHate - We belong here」を撮影した。またコロナ禍でますます可視的になった反アジア人に対する人種主義に対して、被害者を支援するためのプラットフォームをつくるプロジェクトをはじめた。まずアソシエーションはメディアなどでのレッテル貼りや差別などに対して、他の団体と協力して、個人が経験した人種主義の証言を集めることを計画した。2020年に人種主義の被害者から相談を受け付けるためのメールアドレスをつくり、2021年にはそれをさらに発展させ、オンライン・プラットフォーム「ASIES」をつくり、被害者に寄り添い、被害届などを出す援助をはじめた。また通報窓口を設け人種主義のバロメーターをつくり、反アジア人に対する人種主義を計測し、年間報告書を作成する準備をすすめている[3]。

⑵　中国文化の発信とアイデンティティ

AJCFは、メディアなどで取りあげられてきた反人種主義の活動だけでなく、自分たちのアイデンティティを探求するための活動にも力を入れており、年々多様なプロジェクトを行うようになっている。例えば、調査時には中華料理の多様性と豊かさを知ってもらうために開催する「中華料理デー（Chinese food day）」（当初は中華料理週間）、「Yellow is beautiful」と称するアジア人に対するステレオタイ

3　https://www.lajcf.fr/plateforme-asies（2021年12月５日最終閲覧）。

プを壊すための芸術プロジェクト[4]、毎週水曜日の多言語交流会[5]、「アイデンティティ・プロジェクト」としてカフェに集まってのディスカッションなどが行われていた。さらに2021年には中国人監督作品の映画祭を企画しているアソシエーションと協力し、イベントを手伝ったり、映画上映後のディスカッションの司会をしていた。また「中華料理ツアー」としてパリ13区のチャイナタウンのツアーなどをはじめていた。

他にも中国系移民の歴史を学び、自分たちの過去やルーツ、出自を学ぶプロジェクトとして、第一次世界大戦休戦協定の100周年に開かれた中国人労働移民を記念する式典に参列して、記念碑の除幕をし、その後も11月11日の休戦記念日にはアソシエーションの代表者が式典に参列している。

ここでは、調査時点で実施されていたいくつかのプロジェクトについて、インタビューをもとに見ていきたい。まず、「中華料理週間（Chinese food week）」がある。「中華料理週間」は文化発信の活動のなかでもっとも活発に行われていたものである。これはフランスにおいて固定化されたイメージのある中華料理の多様性と豊かさを知ってもらうために2014年から開かれ、2018年まで５回開催された。それ以降は料理フェスティバルなど形態を変えて行われている。５年間のなかで担当するメンバーも入れ替わり、アイデアやノウハウが引き継がれるとともに、新しい考えも取り入れながら続けられてきた。

そのイベントは、「７日間、７つのレストランで、中華料理の７つの見つけ方」というアイデアのもと、「中華料理週間」の毎晩、アソシエーションのメンバーが選んだパリ市内のレストランで中華料理の多様性を見つけてもらうというものである。当日はメンバーが代表的な料理を紹介しつつ、中華料理について説明をする。レストランは、メンバーが数ヶ月間かけて選んでいる。そこでは口コミなどをもとに料理の質やサービスなどを検討して十数件のレストランのリストをつくり、「中華料理週間」に協力してもらうレストランを決めている。当日に出す料理は、それぞれの店の料理長や店長とともにコースを練り上げ、それを提供する。料理はメンバーが評価するものや料理長のお勧めなどをもとに、幅広く中華料理を知ってもらえるようなものが選ばれている。

F（25歳男性）によると、フランスでは、日本については「Japan Expo」のようなイベントがあるのに対して中国についてはほとんどイベントがなく、春節のお祭りくらいで、すべて「伝統的」なものであったという。中華料理についても、炒飯や餃子、牛肉とタマネギの炒め物くらいしか知られていない。そこで「中華料理週間」では自分たちが「正統」だと思うと同時に「最新」のものを選んでいるという。この「最新」というのは、中国で新しいものではなく、フランスにおいて「最新」のものを意味する。ここには、フランスで単純化されてきたものではない、中国文化への新しいイメージを発信しようという試みがみられる。

4　「Yellow is beautiful」では、自分たちの写真を撮って写真展を開催したり、動画を作成してインターネットで公開したりし、社会における自分たちのイメージを脱構築しようとしている。2020年２月には、パリ13区役所で開かれた春節のフェスティバルに参加し、ショーを行っていた。

5　多言語交流会ではフランス語、英語、標準中国語、広東語の４つの言語を使用するとし、参加者によってどれを使うかを決め、交流を深めていた。多言語交流会は人気で、毎週20人近くが集まっていたという。

（「中華料理週間」ウェブサイトより、http://www.chinesefoodweek.com 2021年12月５日取得）

自分たちのルーツをめぐっては、「アイデンティティ・プロジェクト」として、カフェに集まってのディスカッションが開かれていた。その目的は、AJCFには似たようなプロフィールの若者が集まっているが、アイデンティティについては異なる。自分たちがどのようなアイデンティティを持っているのか、またどのような経験をしてきたのかを話し、学び合うというものであった。調査時点で３回実施されており、少し時間が空いてしまったが４回目を実施したいという意向を担当のＫ（32歳 男性）は持っていた。

これまで取りあげてきたテーマを見ていくと、第１回は「関係」で、親子、友達、恋愛、職場などさまざまな場での人間関係や人種主義的なからかいの経験を議論したという。また話題は社会との関係にも広がり、広告での表象についても取りあげた。この回は議論が活発に行われ、興味深い内容であったとＫは振り返る。例えば、差別や人種主義的なからかいについて、それぞれが違う風に捉え、対応していたという。からかいの程度にもよるが、多少のことで怒ってしまう人もいれば、すぐに「いいえ」といって遮る人もいる。どのようなタイミングで人種主義と感じるのか、攻撃されていると感じるのかなど、それぞれが違った感覚を持っていることで議論が活発になった。また、広告についても、それぞれが異なった反応を示していた。例えば、有名ブランドの広告で、若い痩せた中国人女性がイタリアでスパゲティを箸で食べている広告があった。それを面白いと思う人もいれば、ショッキングなことだと思う人もいて感じ方が違かったという

第２回は、「言語」をとりあげ、どのように標準中国語を学び、どのように感じているのかを議論したが、このテーマは難しく、議論が盛り上がらなかったという。第３回は「中国のソフトパワー」

を取りあげたが、こちらは面白かったそうだ。中国のソフトパワーが日常生活にどのようにインパクトがあるのか、自分たちの選択にどのような影響を及ぼしたのか、などについて議論したり、中国政府が中国語および中国文化に関する教育機関として世界各国に設立している孔子学院が中国文化を広めることに貢献しているのかについて意見交換した。また中国文化がソフトパワーなのか、それとも親の文化でしかないのか、など活発に話が進んだ。このようにディスカッションでは、お互いの意見の違いを否定するのではなく、その多様な考えを尊重し、違いを楽しむことが重視されていた。

AJCFの活動は、中華料理の紹介やディスカッションなど、既存の文化に対抗するようなカウンターカルチャーを提示するものではない。むしろ、フランス社会のなかで伝統的に評価されてきた形態で自分たちの文化発信したり、ルーツを探求したりしていた。そのため、社会に「対抗」するのではなく、フランス社会のなかに自分たちの出身文化の場所をつくり、それを通して自分たちの存在を承認させることを目的としているといえるだろう。このことは、AJCFに参加する若者が、多かれ少なかれ社会的にも経済的にも「成功」していること（Chen 2016：39）とも関係している。

5．出会いと新しい発見の場としてのAJCF

「友達がアイデンティティについての討論会があると招待してくれたんです。興味があるかと聞かれて行ってみることにした。最初はAJCFはとても「共同体的」だというイメージを持っていました。ベトナム出身者と中国出身者は違うと思っていたし。だから好奇心から行ってみたんです。参加して、話してみたら、みんな同じではないということに気付いたんです。私はアジア系の人たちと一緒に暮らしてきましたが、それは私くらいで、他の人たちは他の出自の子どもたちと育っていました。みんな違う経験をしてきたということを知ることができました。こういうことを共有できるのはよいことですよね。」（O 25歳男性）

大半のメンバーは、中国系移民や第二世代の団体を探していたわけではなく、AJCFへの参加は「偶然」によることが多い。知り合いに紹介されたり、イベントへの手伝いをお願いされたり、またインターネットでイベントの告知を見てつながりができたりして活動に参加するなかで、だんだんとコミットしていくようになる。代表を務めたFも当初はAJCFのことは知らずに偶然声をかけられたことがきっかけで関わるようになったという。彼はインターンシップで３ヵ月、中国に行き、インターネットサイトに関連する仕事をし、フランス語で中華料理のレシピを紹介するサイトを担当していた。フランスに帰ってからアジア料理を紹介するブロガーから一通のメールを受け取り、交流を深めていき、そこでAJCFの存在を教えてもらったという。「中華料理週間」に誘われたが、当時は金銭的な余裕がなく参加できず、後で写真や記事を見たら、とても良さそうな雰囲気だったので、第２回から参加するようになったそうだ。

調査時点でアイデンティティ・プロジェクトを担当し、デモなどにも積極的に参加しているKも、

AJCFへの参加はまったく偶然のものであったという。彼はMeetAppという同じ関心を持つ人びとが集まったり、イベントを企画したりするオンライン・プラットフォームでアジア系の友達を作るグループに参加した。そこでAJCFに関わっている若者と出会い、声をかけられた。AJCFではこれまで冬眠状態だったプロジェクトを新しく行おうとしており、それを手伝ってほしいと依頼され、快諾することにしたという。もともとAJCFのことはまったく知らず、人種主義的暴力など中国系移民に対するさまざまな事件に対して声を上げていることも認識していなかったそうだ。

こうしたAJCFへの参加は新たな「出会いの場」となる。例えば、G（26歳女性）は、AJCFでは多くの人と出会うことができ、そのなかに楽しい人がたくさんおり、レストランやバーでの月一回の交流会がとても良い機会であるとアソシエーションへの参加を楽しんでいた。一緒にインタビューをしたH（24歳女性）も「私たちはまじめな話もしますが、冗談を言ったりして、楽しんでいるんです」と続ける。このように、必ずしもプロジェクトだけでなく、単に雑談をしたりし、交流を深め、冗談を言い合ったりできる友達を見つけ、「本当の友情」だと考えられるものを築くことができたり、友達のネットワークが広がったと話す若者が多い。

こうしたAJCFへの参加に対して、大半の若者は「出会い」を求めていたわけではない。C（26歳女性）はプロジェクトが興味深かったためAJCFに参加した。まずはプロジェクトだけという気持ちだったが、最終的にアソシエーションに留まることになった。それは自分と似たような経験をしてきた若者との出会いがあったからだという。彼女の大学には中国人のアソシエーションがあったが、それは留学生のもので、中国で育った若者とフランスで育った若者ではまったく価値観が異なっていたが、AJCFに参加する若者とは多くをわかり合えたという。Fも同様のことを語っていた。

> 「最初は中国人の友達がほしかったわけではないんです。単にプロジェクトのためにアソシエーションに参加しました。フランス人が本当の中華料理を知らないことなどに違和感を感じていて、プロジェクトを知ったときに、これはやらなくてはならないと思ったんです。その後、自分と同じような人たちに会って、それが面白かった。出会って面白かったんです。中国系だからといって同じ価値観を持っているわけでもないし、楽しいですよ。」（F 25歳男性）

Fも含め大半の若者は、以前は中国系の友達がいなかったが、アソシエーションに来て自分と似たような若者と出会うことになった。そして同じ問題意識を持っていたということだけでなく、親が昔同じ歌を聴いていたことなどさまざまな側面で共感していく。アソシエーションで見つけた友達は仕事や大学とは異なる友達で、より深い付き合いができ、恋人を見つけた人もいるという。

なお、創設メンバーの中心は温州系の若者であり、現在もメンバーの約３分の２を温州出身者が占める。潮州や広東系の若者も参加しているが、出自をめぐっての対立は見られない。後者の若者は、AJCFではじめて温州出身者に出会ったと語るが、活動を通してお互いを深く知っていくことになる。それぞれの文化をめぐって冗談を言い合うこともあるが、それはお互いを尊重し合い、多様性を楽し

んでいることの顕れでもある。

そして、AJCFへの参加は、自分と同じ境遇に置かれた「友達」と出会うだけでなく、仕事以外の活動をすることで、新しいものの見方を得る機会となる。これまで多かれ少なかれ意識はあったとしても、自分たちのルーツやその社会的背景に関しての知識を持っていなかった若者が大半である。そのため、活動や交流会への参加などを通して、自分の育った背景について学んだり、ネットワークをつくったりし、自分がどのようなルーツなのかを考え、社会における差別の問題などを深く考えたり、意識するきっかけにもなっていた。

例えば、Fは、「以前はなぜこんなに温州出身者がいるのか、パリの中国人はどのような構成なのか、なぜ温州出身者があるところに固まっていて、潮州出身者は別のところに固まっているのかなどをまったく知らなかったが、AJCFでその背景を学んだ」と振り返る。さらに暴力事件や殺人、売春などについても、アソシエーションに入ってから学び、関与していくようになったそうだ。

KもAJCFに参加するなかでものの見方が変わったと振り返る。少し前に中国の哲学者を紹介している人に出会ったが、現在、こうした中国の伝統的な文化が以前よりも知られなくなっていることに気付き、中国の歴史や文化を知らなければならないと考えるようになったという。彼は今でも中国系移民の子どもとして、どのように中国を考えるのかは迷うことがあるそうだ。中国が良いのか悪いのかということは、西洋で育ち、その考え方を身につけているので答えるのが難しいことには変わりないが、AJCFで学ぶことで自分の置かれた状況を客観視できるようになったという。

このようにAJCFの活動への参加は偶然であることが多いが、かれらは参加するなかで自分たちの育った社会的背景を学んだり、ルーツを深く考えたり、人種差別の問題に向き合ったりする。そしてそのことによって、かれらは自分たちのフランス社会での存在に意味を見つけようとしていた。

6．おわりに

本稿では、フランスの中国系移民第二世代が設立したアソシエーションの活動とそこでの若者の経験を考察してきた。AJCFに参加する若者は高学歴者が多く、フランス社会へ統合されている者が多い。かれらは必ずしも中国系移民第二世代としてのアソシエーションを求めていたわけでも、それに参加する意志を持っていたわけではない。一部の若者が立ち上げたアソシエーションに偶然参加することで、自らのルーツを探求し、同じルーツを持つ若者同士で連帯することに意義を見出すようになっていた。

こうした若者の活動は、文化的な発信や政治的参加を通して「中国系フランス人」としてフランス社会に参加するとともに、そこに居場所を「つくる」活動である。その活動内容は、マグレブやサブサハラ諸国など旧植民地出身のムスリム移民第二世代が実践するラップをはじめとするカウンターカルチャーなどとは異なるものであった。これは社会統合と並行する形でなされ、社会統合されているからこそできるトラックでの活動であるともいえる。

社会的に統合された第二世代の若者たちが「立ち上がる」のはフランスの中国系移民第二世代に限られない。例えば、日本では高等教育に進学した外国にルーツを持つ若者が「多文化ユースプロジェクト」という団体を立ち上げ、外国につながる子どもたちの支援をしようとしている。かれらはウェブサイトを用いた進路体験記の発信や、多文化共生について若者が話し合う「しゃべり場」の提供、外国につながる若者に関するアンケート調査などを行っている。創設メンバーは、大学に進学して就職活動をする際に、日本人学生でも留学生でもない自分たちに対する支援が十分にないことに気付き、それを補うために自分たちの経験を後輩に共有していけないかと活動をはじめたという（王・山﨑2021）。日本とフランスで社会学的な背景の違いなどはあるが、当事者自身が後続世代を助けようとする意志などはAJCFの事例と共通するところである。こうしたことは、移民第二世代が社会統合を果たすなかで、社会にどのような居場所があるのか、そして若者たちが自分たち自身でどのように居場所をつくっていくのかを問うものであろう。本稿ではひとつの団体の事例のみを扱ってきたが、他の出自をもつ移民第二世代の団体や国際比較などは筆者の今後の課題としたい。

【付記】

本研究はJSPS科研費 17H04570（研究代表者：山本須美子）の助成を受けたヨーロッパにおける中国系新移民第二世代に関する共同研究の成果の一部です。調査に協力してくださったすべての方に記して謝意を表します。

【参考文献】

Beraha, R. ed. (2012), *La Chine à Paris*, Robert Laffont.

Cattelain, C., et al. (2002), « Les modalités d'entrée des ressortissants chinois en France », *Migrations études*, 108.

Chen, K. (2016), « Les associations chinoises: la transition geenérationnelle d'immigrés chinois aujourd'hui à Paris », *Hommes & Migration*, 1314：35-42.

Chuang, Y.-H. (2013a), « Émergence et régression d'une enclave urbaine: les grossistes chinois dans l'Est Parisien », *Migrations Société,* 149(5)：191-208.

——— (2013b), « Les aventuriers et les naufragés: deux types d'immigrés chinois à Paris, ou une face cachée du miracle chinois », *Migrations Société*, 149(5)：175-90.

——— (2013c), « Les manifestations des Chinois de Belleville: négociation et apprentissage de l'intégration », *la vie des idées*.

——— (2015), *Migrants chinois à Paris: au-delà de l'« intégration »: la formation politique d'une minorité*, thèse de doctorat, Université Paris-Sorbonne.

——— (2017), « La colère du middleman: quand la communauté chinoise se manifeste », *Mouvements*, 92(4)：157-168.

——— (2020), « La racisme anti-Asiatiques, entre oubli et mépris », O. Slaouti and O. Le Cour Grandmaison eds., *Racismes de France*. La Découverte, pp.199-214.

——— (2021), *Une minorité modèle? : Chinois de France et racisme anti-Asiatiques,* La Découverte.

Chuang, Y.-H. et Le Bail, H. (2019), « How marginality leads to inclusion: insights from mobilizations of Chinese female migrants in Paris », *Ethnic and Racial Studies,* 43(2)：294-312.

——— (2020), *Diaspora chinoise, générations, engagement,* Institut des Migrations..

Chuang, Y.-H. et al. (2020), « Introduction: Chinese Xin Yimin and Their Descendants in France: Claiming Belonging and Challenging the Host Country's Integration Model »,*Journal of Chinese Overseas,* 16(2)：153-64.

Chuang, Y.-H. et Trémon, A.-C. (2020a), « Capitalisme flexible et conflits urbains: les nouveaux territoires des mobilités chinoises », Y.-H. Chuang and A.-C. Trémon eds., *Mobilités et mobilisations chinoises en France,* Terra HN éditions.

――― (2020b), « Le commerce de gros érigé en problème public: conflits et récits à Paris et Aubervilliers », Y.-H. Chuang and A.-C. Trémon eds., *Mobilités et mobilisations chinoises en France,* Terra HN éditions.

Le Bail, H. (2017), « Les trottoirs de Belleville: les prostitutées chinoises entre répression et revendication », *la vie des idées.*

Lévy, F. et Lieber, M. (2009), « La sexualité comme ressource migratoire », *Revue française de sociologie,* 50(4)：719-746.

Li, Y. (2020), « Les mobilités étudiantes: la création d'entreprises par les diplômés chinois à Rouen », Y.-H. Chuang and A.-C. Trémon eds., *Mobilités et mobilisations chinoises en France,* Terra HN éditions..

Li, Z. (2020), « The rearticulation of the links between the Chinese diaspora and receiving countries as well as sending regions in China: The case of Wenzhou migration to France », L. Yue and W. Simeng eds., *Chinese Immigrants in Europe: Image, Identity and Social Participation.* De Gruyter, pp.127-50.

――― (2021), *Les entrepreneurs chinois en France: Le modèle de la diaspora Wenzhou,* Presses Universitaires François-Rabelais.

村上一基（2021),「フランスにおける中国系移民子孫の学校外学習――グローバルな教育ヴィジョンと母語教育への関心の高まり」『東洋大学社会学部紀要』58(2)：51-64.

Poisson, V. (2005), « Les grandes étapes de cent ans d'histoire migratoire entre la Chine et la France », *Hommes & Migration,* 1254：6-17.

――― (2006), « Des réseaux transnationaux: le cas des Chinois du Zhejiang », *Outre–Terre,* 17(4)：421-30.

Pribetich, J. (2005), « La construction identitaire d'un quartier: l'exemple de Sedaine-Popincourt », *Hommes & Migration,* 1254：82-90.

Ruoxi, L. (2020), « Achieving better structural integration? Evidence from the career pathways of second-generation Chinese immigrants in France », L. Yue and W. Simeng eds., *Chinese Immigrants in Europe: Image, Identity and Social Participation.* De Gruyter, pp.151-64.

Santelli, Emmanuelle (2016), *Les descendants d'immigrés,* La Découverte（＝2019（村上一基訳）『現代フランスにおける移民の子孫たち』明石書店).

朱東芹（2018),「「中国新移民」の現状」奈倉京子編『中国系新移民の新たな移動と経験――世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』明石書店, pp.36-74.

Tran, É. et Chuang, Y. H. (2019), « Social Relays of China's Power Projection? Overseas Chinese Collective Actions for Security in France », *International Migration,* 58(3)：101-17.

Tribalat, M. (1995), *Faire France: une grande enquête sur les immigrés et leurs enfants,* La Découverte.

Wang, S. (2017), *Illusions et souffrances: les migrants chinois à Paris,* Éditions Rue d'ULM.

――― (2020), « Highly skilled Chinese immigrants in France: Career choices, marriage behavior and political participation », L. Yue and W. Simeng eds., *Chinese Immigrants in Europe: Image, Identity and Social Participation.* De Gruyter, pp.75-100.

Wang, S. et Le Bail, H. (2016), « Migrations chinoises, de génération en génération », *Hommes & Migration,* 1314：6-8.

王希璇・山﨑ラジャン バレンシア（2021),「横のつながりをつくり、後輩に経験をつないでいく―多文化ユースプロジェクトを立ち上げて」『Mネット』217: 18-9.

Yong, L. (2020), « The identity crisis of Chinese graduates in France », L. Yue and W. Simeng eds., *Chinese Immigrants in Europe: Image, Identity and Social Participation.* De Gruyter, pp.101-26.

Yun, G. et al. (2006), « De la migration au travail », *Travail, genre et sociétés,* 16(2)：53-74.

Yun, G. et Poisson, V. (2005), « Nouvelles formes d'esclavage parmi les Chinois récemment arrivés en France », *Hommes & Migration,* 1254：29-44.

【Abstract】

The Rise of Second-generation Chinese Immigrants in France: A Case Study of the Association des Jeunes Chinois de France

Kazuki MURAKAMI

Issues pertaining to the education of second-generation immigrants are often linked to educational achievement, educational guidance, discrimination, exclusion after school, and deviant behavior. Some of the common problems tend to be associated with working-class neighborhoods, for example school and family circumstances, failure at school, and involvement in gangs, in particular with regard to the descendants of Maghreb and African immigrants. The descendants of Asian immigrants are seen as models for success, yet they also face setbacks at school, discrimination and racist acts, and problems with integration into French society and identity. In this context, the "French Chinese Youth Association (Association des Jeunes Chinois de France, AJCF)" was established in 2009.

The objective of this article is to examine the purpose and activities of the association established by this second generation of Chinese immigrants, and to discuss what it means for them. Based on surveys carried out in Paris and Aubervilliers, this article shows that they disseminate Chinese culture, and at the same time are engaged in anti-racial discrimination movements. Through this association, youths participate in French society as Chinese French, such as political participation, and also create a place in the society. They explore their roots and the significance of their roots as a form of solidarity between Chinese youths.

AJCF is active in dealing with the issue of racial discrimination, and the founding members often appear in the media. Though their original goal was to help younger generations by way of solidarity, in the face of prejudice and discrimination against them, they decided to establish an association. Most members were not seeking an organization like AJCF, but noted rather that their participation in AJCF was often by chance; for example they were invited or asked to help with different events, or they found it by announcements on the Internet. Yet as they participate in Association activities, they tend to gradually become more committed. Participation is also an opportunity to learn about the social background of their lives, reflect on their own roots, as well as to think deeply about the problem of discrimination in society, and to be aware of it.